RILAS 研究部門「イメージ文化史」主催国際シンポジウム　報告書

2017.12.7

写真とフェティシズム
Le fétichisme et la photographie

主催：早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」
共催：東京大学表象文化論研究室
　　早稲田大学文化構想学部表象・メディア論系

日時：2017 年 12 月 5 日（水）17:00-19:30
場所：早稲田大学戸山キャンパス 33 号館第 1 会議室

発表者：橋本一径（早稲田大学教授）
　　ミシェル・ポワヴェール（パリ第 1 大学教授）

早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」では、「写真とフェティシズム」というテーマで、本学の橋本一径先生と、パリ第一大学からお迎えしたミシェル・ポワヴェール先生にご発表いただいた。

まず、橋本先生からポワヴェール先生のご紹介と、本シンポジウム企画の経緯と狙いについてのご説明があった。

つづいて発表にうつり、まず橋本先生が「写真における二つのフェティシズム」という題目で発表された。ここでいう二つのフェティシズムとは、写真に写し出された被写体の「モノ」性に関わるフェティシズムと、写真というメディアそのものがもつ「モノ」性に関わるフェティシズムであり、写真には両者が重なり合っていることを論じられた。特に、様々な写真の捉え方を分析された上で、生のフェティシズム、死のフェティシズムへと話を敷衍させ、遺品の写真等を手掛かりに、写真のもつこれら二重性の問題を解き明かした。発表の後、ポワヴェール先生がコメントされ、さらに会場からは本学の鈴木雅雄先生よりフォノグラフとの関連について質問がなされた。橋本先生が応じたほか、声の捉え方について、ポワヴェール先生も議論に加わった。

つぎに、ポワヴェール先生が「覆面と首輪――ウィリアム・シーブルックの写真とマン・レイによるシュルレアリスム」という題目で発表された。ジョルジュ・バタイユ主催の雑誌『ドキュマン』の 1930 年第８号には、シーブルック（1884-1945）が写した、

覆面を被せられた女性の写真が３枚掲載されている。これらの写真に加え、シーブルックの特異な習慣の観察者でもあった、マン・レイ（1890-1976）の記録などをスクリーンに映し出しながら、覆面を被せられたり、首輪をはめられたりする様々な女性の写真について詳細に分析された。発表後、橋本先生がコメントされたほか、鈴木先生から、マン・レイが自身のフェティシズムを相対化することができたのかという点について質問があった。

（記録：常田槙子）